

マウントメリック刺しゅう ～アイルランドの伝統的な白糸刺しゅう～

Mountmellick Embroidery work : Irish Traditional White Embroidery

永田 貴恵子

NAGATA, Kieko

I はじめに

手芸の種類は多種多様で、刺し、縫い、編む、組む、染める、結ぶなどに大別することができる。その中でも刺し、縫いは手芸で一番大きな要素をしめるもので、これをエンブroidリーとよんでいる。その形態や内容は技術的にも民族的にも独特の特徴を持つようになった。

本稿では世界各地の様々な刺しゅうの中から、日本においてはほとんど知られていないアイルランドの伝統的なマウントメリック刺しゅうについて注目し紹介していきたいと思っている。

アイルランドのマウントメリックの町に Mountmellick Embroidery Museum (マウントメリック刺しゅう博物館) という施設がある。この博物館にはマウントメリック刺しゅうのベッドカバーやテーブルクロスなどが展示されている。また、博物館はマウントメリック刺しゅうの伝統を守ることに力を注いでおり刺しゅうの技術を教える活動を行っている。またマウントメリック刺しゅうに必要な布や糸、図案を購入することも可能である。

本研究ではマウントメリック刺しゅう博物館による伝統技法に基づき、博物館から取り寄せた布と糸、図案を用いて実際に作品の制作をしながら、その過程を示し、技法を学べるようにした。またマウントメリック刺しゅうの特徴あるステッチとフリンジの編み方についても詳しく記した。フリンジについては日本の編み方記号で示したのは他には例がなく特筆すべきものと思われる。

マウントメリック刺しゅうの本は大変少なく、日本語で書かれた本は一冊も出版されていない。本稿では日本で入手可能な布や糸についても調べ、その結果を

記載したのでこれからマウントメリック刺しゅうを学ぶためのテキストになればと思っている。

II マウントメリック刺しゅうとは

マウントメリック刺しゅうとは19世紀初頭にアイルランドのレイッシュ州北部の町マウントメリック(図1)が発祥の白糸刺しゅうであり、ジョアンナ・カーターが考案したものである。町の中を流れるオーウェナス川のほとりに自生する植物をモチーフにして白い厚手の綿サテンの生地(コットンサテンジーンという名称の生地)に白く太い綿の糸を用いてこんもりと厚く盛り上がるように刺しゅうをする。そして刺しゅうをした生地の周囲には白い綿の糸で編んだフリンジをとじ付けるのが特徴である。ドイリーやナイトドレスケース、ベッドカバー等一般の家庭において日用品として使用されるものであり丈夫で洗濯にも耐える丈夫なものが作られた。(図2)



図1 アイルランドの地図



図2 19世紀に作られた枕カバー *Mountmellick work p24*

Ⅲ マウントメリック刺しゅうの歴史

マウントメリック刺しゅうの歴史には三人の女性が大きく関わっている。マウントメリック刺しゅうを考案したジョアンナ・カーター、ジャガイモ飢饉の後の生活を支えるために刺しゅう製品を販売することを行ったミルナー婦人、1970年頃失われていた刺しゅうの復活に尽くした修道院のテレサ・マーガレットマッカーシーである。

1825年頃マウントメリック刺しゅうを始めたのはジョアンナ・カーターである。彼女は15人の地元の少女達に刺しゅうを教えていた。18世紀後半からマウントメリックの町はイギリスの産業の中心地であったマンチェスターになぞらえて「アイルランドの小さなマンチェスター」と呼ばれていた。綿の紡績や製織などで非常に繁栄していたところから手に入れやすい白い綿の布と糸を使用した刺しゅうを発明したのである。マウントメリック刺しゅうは町の中を流れるオーウェナス川のほとりに自生する植物をデザインしているが、それに影響を与えていると考えられるのは、古くからイギリスに伝わるリネンに様々な色の梳毛糸を用いて動植物を刺しゅうしたクルーウェル刺しゅう（図3）ではないかと言われている。マウントメリック刺しゅうもクルーウェル刺しゅうのようにたくさんのステッチを盛り込んでいる。

1841年のアイルランドの人口は約814万人であったと言われる。そのほとんどが農民で、ジャガイモが主要な食べ物であった。しかし、1845年～1849年にかけてヨーロッパから入ってきた立ち枯れ病によりジャガイモがほとんど収穫出来ない状態となった。飢餓とそれに伴う各種の疾病で100万人以上が死亡した。そしてこの悲劇から逃れるために大勢の人々がアイルランドから出ていくこととなった。ブリテン島のリバプールやグラスゴー、アメリカ合衆国やカナダへ移住し

た。移民の数は100万人以上にのぼったのである。そのためアイルランドの人口は激減し、2019年でも人口約490万人であり「ジャガイモ飢饉」以前の人口に戻っていないのである。

飢餓による貧困はマウントメリックの町にも及び、大きな苦労を経験することとなった。

1880年ミルナー夫人は生活を支援するために地元の女性達を雇用して、ジョアンナ・カーターが考案したマウントメリック刺しゅうを製品にして販売することにしたのである。最盛期には50人もの人がドイリーやナイトドレスケース、ベッドカバー等、販売用の刺しゅう製品を生産していた。それはとても評判となり単なる地元の工芸品ではなくなったのである。だが、その後第一次世界大戦及び機械刺しゅうの影響と相まってマウントメリック刺しゅうは減少していった。

1970年頃修道女のテレサ・マーガレットマッカーシーは修道院で一つのパターンを見つけ、失われたマウントメリック刺しゅうの調査を始めた。シスター・テレサは最初クルーウェル刺しゅうのように色のある刺しゅうと考えたようである。その後、町のピムファミリーが保管していたマウントメリック刺しゅうのパターンなどが発見され、マウントメリック刺しゅうは白い糸で刺すのだということも含め多くのことが解明出来たのである。それはシスター・テレサの刺しゅう教室で復元され、オリジナルの図案が保存されることとなった。2003年マウントメリック刺しゅうの保存と保護のためにマウントメリック開発協会の中にマウントメリック刺しゅう博物館が造られた。シスター・テレサは引退する前にコレクションを博物館に寄贈し、現在博物館では作品を展示及び保管している。また、歴史的な作品はロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館でも見ることが出来る。（図4）



図3 クルーウェル刺しゅう18世紀初期
ヴィクトリア&アルバート美術館蔵『ロンドンーヴィクトリア&アルバート美術館所蔵作品による英国刺繍図案集』p12

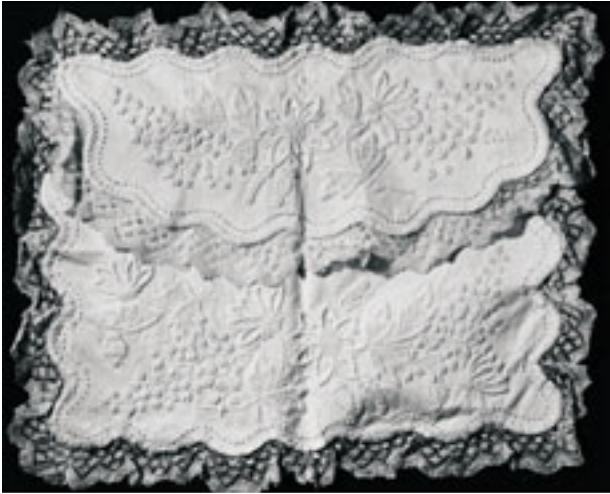


図4 小袋 1880年 ヴィクトリア&アルバート美術館蔵
Mountmwllick Work p15

IV マウントメリック刺しゅうの材料・図案・技法について

本稿ではマウントメリック刺しゅうの伝統を守っているマウントメリック博物館より取り寄せた布、糸、図案を紹介する。

IV-1 材料

①刺しゅう布

コットンサテンジーン (cotton satin jean) (図5) 布の手触りとしてはジーパンと同じような厚みがあるが、表面はサテン織りで光沢がありジーパンの生地よりもしなやかなである。布幅は約150cmである。



図5 コットンサテンジーンとシェニール針
フランス刺しゅう針との太さの比較

②針

先の尖ったシェニール針を使用する。シェニール針は太目の糸や厚手の生地を使用する針である。一般的なフランス刺しゅう針との太さを比較した写真。(図5)

③糸

jomil という商品名で英国のメーカーの糸である。(図6) 1玉65gで10カウントの太さである。日本の20番手のレース糸に相当する。白くする加工はされていないので光沢は強くない。刺しゅうもフリンジを編むのもこの糸だけを使用する。



図6 jomil の糸

IV-2 図案

ブラックベリー、ドッグローズ、シャムロック、オーク、シダなどの植物を、大きさもほぼ実物大に写生するように図案とする。小麦、ブドウ、ヤマユリやパッションフラワーなど自生していない植物の例もあり、時に貝や蝶も見られる。キリスト教ではヤマユリは聖母の花、パッションフラワーは受難を表すと言われるので、宗教的な意味も含めて図案にしたのではないかと考えている。マウントメリック刺しゅう博物館のパッションフラワーとブラックベリーの図案(筆者が制作したブラックベリーの図案を使用したドイリー)を紹介する。(図7、8、9)



図7 マウントメリック刺しゅう博物館の
パッションフラワーの図案



図8 マウントメリック刺しゅう博物館の
ブラックベリーの図案



図9 図8のブラックベリーの図案を使用して筆
者が制作したドイリー

IV-3 ステッチ

マウントメリックで使われるステッチは一般的なフランス刺しゅうの技法と同じである。しかし、マウントメリック刺しゅうの特徴的なステッチとしては①パッド入りサテンステッチ②マウントメリックステッチ③ポルトギューズノッテドステムステッチ④ソーンステッチ⑤ケーブルプレートステッチがあげられる。

(図10～18) これらは、一般的なフランス刺しゅうではほとんど使わないステッチであり、マウントメリック刺しゅうのように厚みを持たせるには不可欠なステッチといえる。

他にも厚く盛り上がるように刺しゅうをするためのステッチとして⑥フレンチノットステッチ(図19～20)や⑦バリオンステッチ(図21～22)も効果的であるので作品制作には多く使用するステッチである。



図10 ①パッド入りサテンステッチ 下縫いはチェーンステッチ

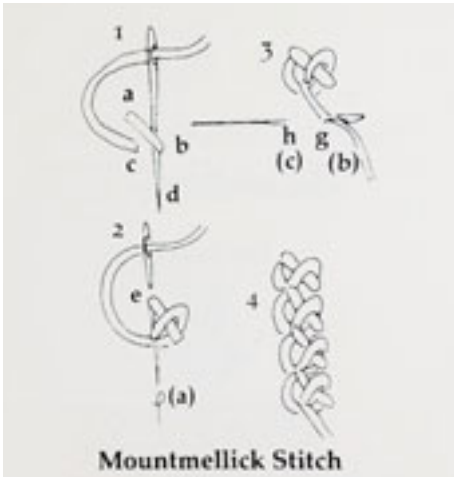


図11 マウントメリックステッチ



図12 刺しゅうしたマウントメリックステッチ

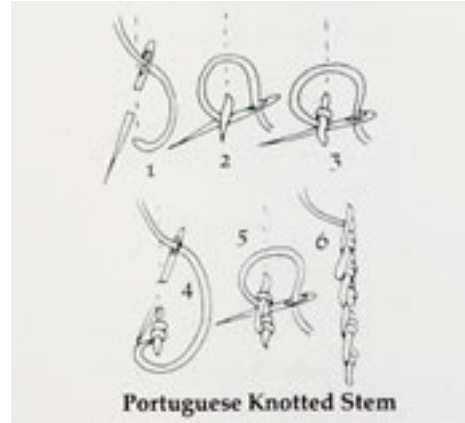


図13 ポルトギューズノッテドステムステッチ



図14 刺しゅうしたポルトギューズノッテドステムステッチ

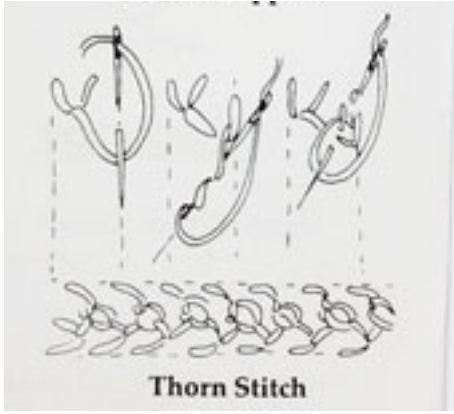


図15 ソーンステッチ



図18 刺しゅうしたケーブルプレイトステッチ



図16 刺しゅうしたソーンステッチ

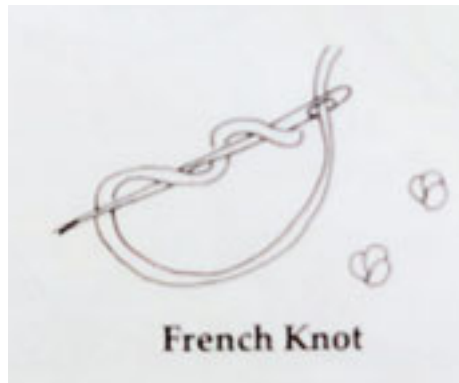


図19 フレンチノットステッチ

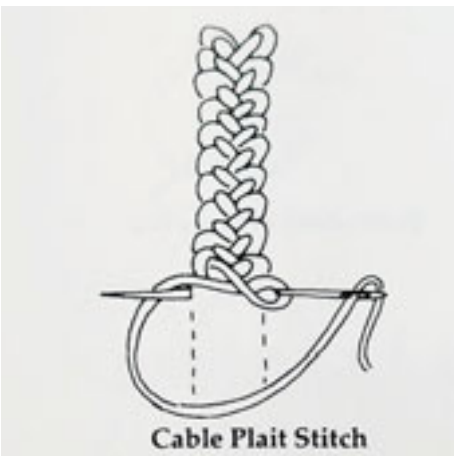


図17 ケーブルプレイトステッチ



図20 刺しゅうしたフレンチノットステッチ

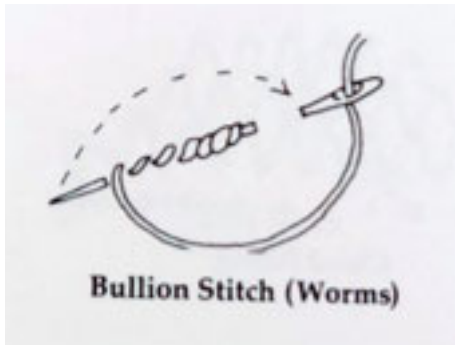


図21 バリオンステッチ



図22 刺しゅうしたバリオンステッチ

マウントメリック刺しゅうでは、ステッチ技法60種類以上が数えられている。それは一般的なフランス刺しゅうに使用されるステッチと同じ技法である。葉の一枚を刺しゅうするにも数種類のステッチを組み合わせたり、葉を一枚ずつ異なったステッチで刺しゅうするなどして(図23)一つの作品の中で数十種類のステッチを使用しているのが特徴である。しかし、オープンワークと言われる、布に穴をあけたりカットしたりする技法は決して使わない。



図23 様々なステッチを組み合わせた葉のサンプラー *Mountmwllick Work* p34

V ドイリーの制作

本稿では伝統的なマウントメリック刺しゅうを記すためにアイルランドのマウントメリック刺しゅう博物館より取り寄せた布、糸、図案を使用してドイリーを制作しその過程を示すこととする。

下記が博物館の図案(図24)である。刺しゅう部分の直径は約23cm。ドッグローズとブラックベリーの伝統的な図案である。博物館の縁は円形であるが、曲線に合わせたフリンジの取り付け方の説明を記すために今回は縁のみスカラップに変更をした。(図25)



図24 マウントメリック刺しゅう博物館の図案
ドッグローズとブラックベリー



図25 縁をスカラップに変更した図案

V-1 道具と材料

- ①布 コットンサテンジーン40×40cm
- ②針 シェニール針22号
- ③糸 jomil
- ④図案 マウントメリック刺しゅう博物館より取り寄せた図案の縁をスカラップに変更したもの。
- ⑤刺しゅう枠 刺し縮み防止のため使用。
- ⑥その他 手芸用複写紙 トレーシングペーパー トレーサーなど。

V-2 準備

- ①布が縮むのを防ぐために水につけて地直しをする。半乾きの時にアイロンをかける。
- ②図案をトレーシングペーパーに鉛筆で写し、布の上に待ち針でとめる。布とトレーシングペーパーの間に手芸用複写紙を挟んで図案をトレーサーでなぞって布に写す。(図26) 古くからのやり方として図案をガラスに貼り付けて光に透かして布に直接鉛筆で写しても良い。



図26 図案を布に写す

V-3 刺しゅう

糸はすべて1本どりで行う。刺し始めと刺し終わりは玉留めをしない。小さくバックステッチ(返し縫い)をして糸をとめる。糸端はステッチの裏の縫い目にくぐらせて始末をする。どこの図案から刺し始めなければならないという決まりは無いが、図案の重なっているところは下側の図案から刺していく。遠近のあるものは遠い方から刺して行くのが良い。

博物館の図案にステッチの指示は無いので、筆者がステッチの組み合わせを考えた。IV-3 ステッチで述

べた通りマウントメリック刺しゅうはたくさんのステッチを使用する。特徴的な5つのステッチである①パッド入りサテンステッチ②マウントメリックステッチ③ポルトギューズノッテドステムステッチ④ソーンステッチ⑤ケーブルプレートステッチとバリオンステッチ、フレンチノットステッチは必ず使うこととした。

そして(図23)の様々な葉のステッチのように、今回のドイリーの葉はすべて異なるステッチの組み合わせで刺しゅうすることにした。装飾的にも美しく仕上

がるようにバランスを考えてステッチを決めた結果、ステッチは37種類を使用した。

どのようなステッチを使用して刺しゅうしたかがわかるように図案に番号を記入した。(図27)Aはブラックベリー、Bはドッグローズ、Cはドッグローズのつぼみ、葉は1から21まで番号を付けてステッチの名前を記載した。(図28~51)

茎はすべてアウトラインステッチで刺した。(図52)最後に周囲のスカラップ部分をボタンホールステッチで刺す。(図53)

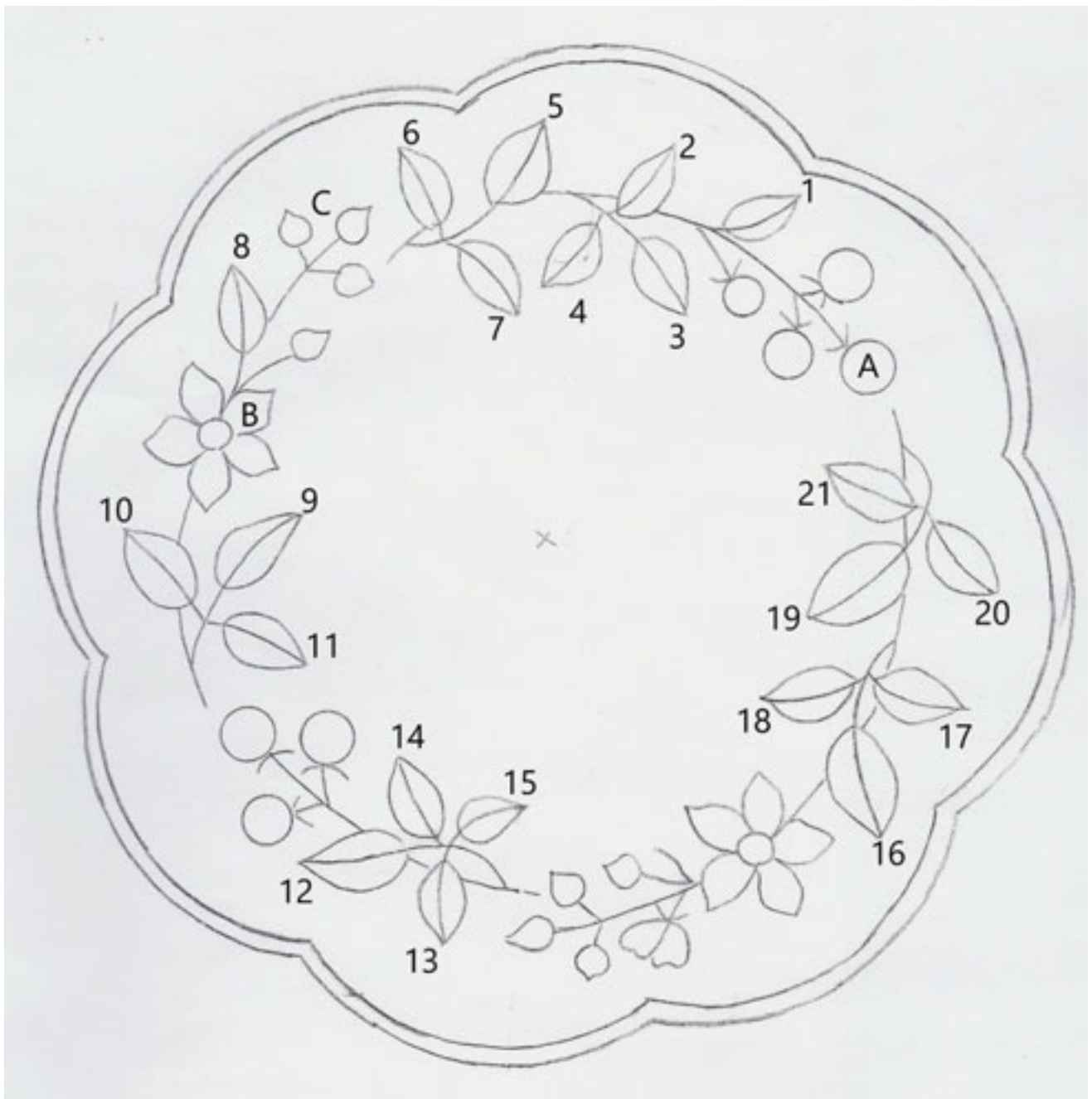


図27 A ブラックベリー B ドッグローズ C ドッグローズのつぼみ 葉1~21まで番号をつけた図案



図28 A ブラックベリー
フレンチノットステッチ、がくは
バリオンステッチ



図31 1 ボタンホールステッチ (葉の外側)、フレンチノットステッチ (葉の内側)



図29 B ドッグローズ
パッド入りサテンステッチ、花芯
はフレンチノットステッチ



図32 2 アウトラインステッチ (葉の外側)、バリオンステッチの間にストレートステッチ (葉の内側)



図30 C ドッグローズのつぼみ
パッド入りサテンステッチ



図33 3 ウィップドステムステッチ (葉の外側)、ボタンホールドフェザーステッチ (葉の内側)



図34 4コーチングステッチ (葉の外側)、シードステッチ (葉の内側)



図37 7フレンチノットステッチ (葉の外側)、クローズドフェザーステッチ (葉の内側)



図35 5マウントメリックステッチ (葉の外側)、交互のマウントメリックステッチ (葉の内側)



図38 8ツイステッドチェーンステッチ (葉の外側)、フートイヤーステッチ (葉の内側)



図36 6シングルフェザーステッチ (葉の全部)



図39 9ケーブルチェーンステッチ (葉の外側)、トレリスフィリングステッチ (葉の内側)



図40 10コーディングステッチ (葉の外側)、ゾーンステッチ (葉の内側)



図43 13ポルトギューズノッテドステムステッチ (葉の外側)、ループステッチ (葉の内側)



図41 11レイジーデイジーステッチ (葉の全部)



図44 14クレタンステッチ (葉の全部)



図42 12パレストリーナノットステッチ (葉の外側)、フェザーステッチ (葉の内側)



図45 15コーラルステッチ (葉の外側)、フライステッチ (葉の内側)



図46 16ポルトギューズノットドステム
ステッチ (葉の外側)、デタッチ
ドボタンホールステッチ (葉の内
側)



図49 19ケーブルプレートステッチ (葉
の外側)、ヘリンボーンステッチ
(葉の内側)



図47 17コーラルステッチ (葉の外側)、
フレンチノットステッチ (葉の内
側)



図50 20ボカラコーチングステッチ (葉
の全部)



図48 18サテンステッチ (葉の全部)



図51 21チェーンステッチ (葉の外側)、
バリオンステッチ (葉の内側)



図52 茎のアウトラインステッチ



図53 縁のボタンホールステッチ

以上ですべて刺しゅうが完了した。(図54)その後残っている図案線を消す。

図案線の消し方についてはV-6の仕上げのところで説明をしている。



図54 刺しゅうを刺し終えた 図案を消す前

V-4 フリンジ

マウントメリック刺しゅうでは刺しゅうをした布の周囲にニットフリンジを取り付けるのが特徴である。刺しゅうとニットフリンジは同じ糸を使用する。

- ①糸は4本どりにし、3号棒針を使用して編む。
- ②棒でかける作り目で9目作り目を作る。
- ③1段目は、表目・かけ目・左上2目一度を繰り返して編む。
- ④2段目は、1段目と同様に表目・かけ目・左上2目一度を繰り返して編む。
- ⑤③④を繰り返してフリンジを取り付ける寸法よりも余裕を持って編む。
- ⑥編み終わりは3目残して6目を伏せ目にする。
- ⑦伏せ目をしなかった3目をほどいてフリンジにする。(図55)



図55 編み終えたフリンジ(長さ90cm)
3目をほどいてフリンジにする

V-5 フリンジの取り付け

- ①編んだフリンジを周囲のボタンホールステッチの頭に表側を見て待ち針でとめる。真っ直ぐなところは伸ばさないようにしてカーブのところは曲線に合わせてゆとりを持ってとめる。(図56)
- ②次に編んだ糸と同じ糸を1本どりでフリンジをとめていく。ボタンホールステッチの裏側で小さくバックステッチをして糸を固定したらボタンホールステッチの表側の頭に針を出す。
- ③ボタンホールステッチの頭の糸とフリンジの編地の段の目の糸を巻きかがりてとじていく。布まですく

わないように注意する。(図57)

④編地の最初と最後はコの字とじにする。(図58)

⑤フリンジの取り付けが完了したら、裏側からボタンホールステッチのきわで刺しゅう布の外側の布を切り取る。(図59)



図56 フリンジを待ち針でとめる



図57 ボタンホールステッチの頭とフリンジを巻きかがりでとじる



図58 編地の最初と最後をコの字とじにする



図59 裏側からボタンホールステッチのきわで布を切り取る

V-6 仕上げ

フリンジを取り付け完成した刺しゅう作品は残っている図案線を消す。

①金属製ではない容器に粉石けんを熱湯で溶かしその中に、刺しゅう作品を24時間または複写の色が消えるまで浸ける。

- ②ホーローの容器に粉石けんと十分な水を入れて沸騰させ、図案線が完全に消えるまで煮沸させる。刺しゅうが鮮やかな白になる。
- ③水で完全に洗い流し自然乾燥させる。
- ④アイロンの温度は綿に設定する。アイロン台の上にタオルを置き、白い綿の布をかぶせる。その上に刺しゅうした面を下にして置く。濡らした布をあてて完全に折りがなくなるまでプレスする。
- ⑤刺しゅう作品に糊付けはしない。
- ⑥完成した刺しゅう作品ドイリー (図60)



図60 完成した刺しゅう作品ドイリー フリンジを含む直径約40cm

VI ニットフリンジの編み方

マウントメリック刺しゅうでのニットフリンジの編み方には2種類ある。編み方Aと編み方Bとして紹介する。

- ①糸は3本か4本どりにして棒針で編む。
- ②棒針は日本製ならば2号 (2.7mm) 3号 (3mm) 4号 (3.3mm) くらいが適している。イギリス製では12号 (2.75mm) 11号 (3mm) が適している。
- ③作り目は「棒で編みつける作り目」の技法で作る。この技法は薄く出来る、伸縮性が少ないという特性がある。(図61~65『作り目のいろいろ』日本ヴォーグ社 p42より)
- ④編み目の数は3の倍数とし、通常は6目9目、12目のいずれかで編む。
- ⑤1段目も2段目も同じ編み方を繰り返し編んで行く。往復編みといって表裏の区別がない編地になる。
- ⑥日本では編み目記号 (図66) がJISで統一されているので本稿では誰しもが理解しやすいように編み図を作成した。

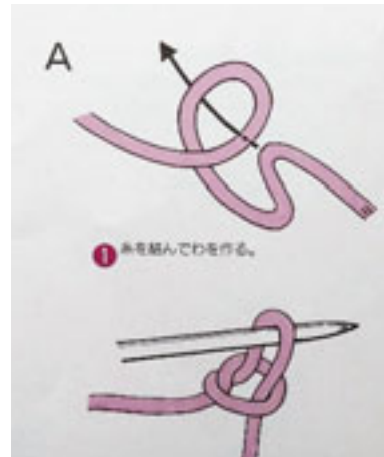


図61 糸を結んで輪をつくる 棒針を輪に入れる



図62 棒針にかかった目に別の棒針を入れる

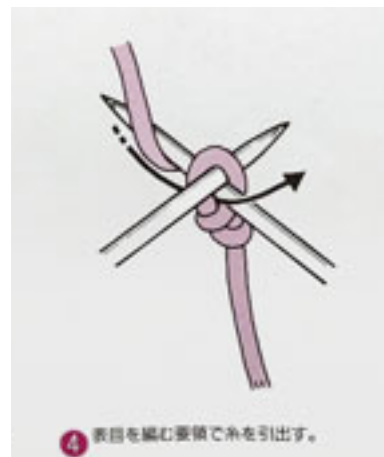


図63 輪の中から糸を引き出す



図64 右針にかかった目を左針に移す
これを繰り返して目をつくる

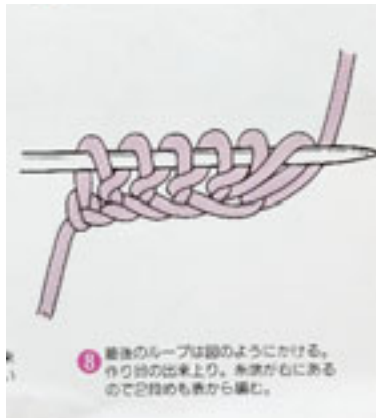


図65 最後の目は左の針にかける

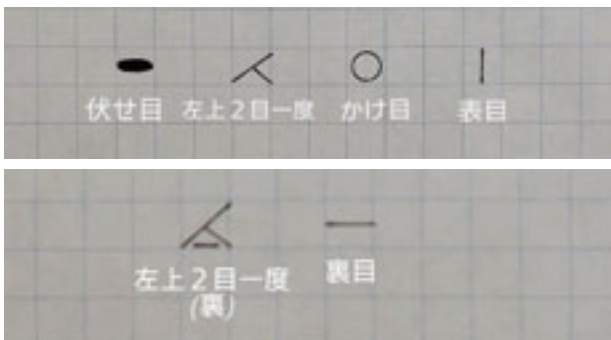


図66 JISの編み目記号

VI-1 フリンジ編み方A 編み目記号 (図67)

- ①糸は3本どりにして2号棒針で編む。
- ②棒で編みつける作り目で9目作り目を作る。
- ③1段目 表目・かけ目・左上2目一度を繰り返して編む。(往路)
- ④2段目 1段目と同じく表目・かけ目・左上2目一度を繰り返して編む。(復路)
- ⑤最後は6目伏せ目をして、3目をほどいてフリンジにする。(図68~69)

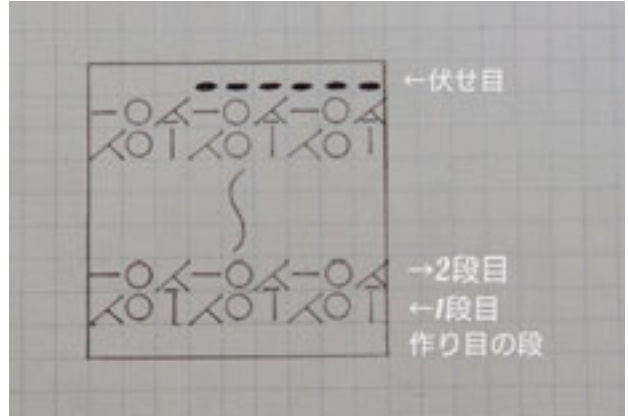


図67 フリンジAの編み目記号



図68 フリンジAの編地



図69 フリンジAの編地をほどいてフリンジにする

VI-2 フリンジ編み方B 編み目記号 (図70)

- ①糸は3本どりにして2号棒針で編む。
- ②棒であみつける作り目で9目作り目を作る。
- ③1段目 かけ目・左上2目一度・表目を繰り返して編む。(往路)
- ④2段目 1段目と同じくかけ目・左上2目一度・表

目を繰り返して編む。(復路)

⑤最後は6目伏せ目をして、3目ほどいてフリンジにする。(図71~72)

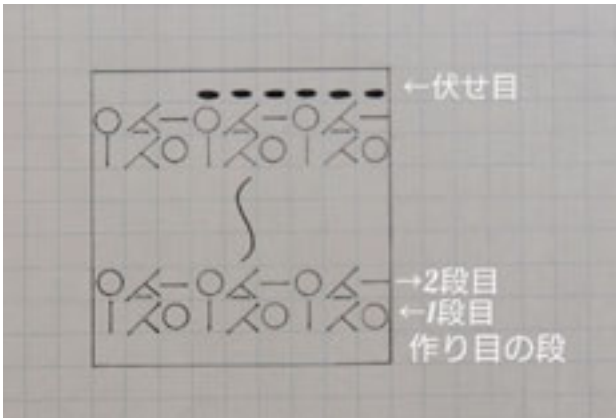


図70 フリンジBの編み目記号



図71 フリンジBの編地



図72 フリンジBの編地をほどいてフリンジにする

編み方Aと編み方Bの編地を比較して見るとAはやや詰まった編地になり、Bは少し透けたような編地になる。しかし大きな差があるとまでは言えない。し

たがって自分が編みやすい方を選択すれば良い。

編地をほどいてフリンジを作る方法はマウントメリック刺しゅう以外では例が無いと思われる。大変特異な技法であると言える。

VII 日本の糸での刺しゅうとフリンジおよび布の比較

マウントメリック刺しゅうの糸や布をアイルランドから取り寄せるのは必要な時にいつでも入手するというわけにはいかない。

マウントメリック刺しゅう博物館のjomilの糸は日本の20番手の綿糸に相当する。そこで、入手しやすい日本の4種の糸①から④の糸で(図73~76)刺しゅうとフリンジのサンプルを制作し比較してみた。

VII-1 日本の4種類の糸



図73 ①オリムパスエミージェランデ



図74 ②元廣ミル・フローラ



図75 ③横田ダルマ#20



図76 横田ダルマソフトレース

Ⅶ-2 4種類の糸による刺しゅうと編地の比較

①から④の糸で、葉をマウントメリックステッチ、ケーブルプレートステッチ、ソーンステッチで刺しゅうしたもの糸を4本どりにして3号の棒針でフリンジAの編み方でサンプルを制作した。布はアイルランドのコットンサテンジーンを使用した。4種類の糸の違いを比較した。(図77)

- ①のエミーグランデは布との馴染みが一番良いと感じた。糸のすべりも良く編みやすい。
- ②の元廣ミル・フローラは白さが足りずくすんで見える。糸はきしんで編みにくい。
- ③の横田ダルマ#20は光沢が全く感じられず薄いベージュ色に見える。糸はすべりが良く編みやすい。
- ④横田ダルマソフトレースは白すぎてしまい浮き上がってしまう。糸はややすべりが悪い。



図77 4種類の糸による刺しゅうと編地の比較

以上の点からコットンサテンジーンとの馴染みも良いエミーグランデが適しているとの結果となった。

Ⅶ-3 コットンサテンジーンに代わる日本の布

マウントメリック刺しゅうに使われる生地は刺しゅう生地のメーカーにおいてコットンサテンジーンとして生産されているものは無い。東京の刺しゅう専門店越前屋にも扱いは無いので洋服の生地から探してみた。コットンサテンジーンと似ているように見える生地を2種類比較してみた。①厚地サテンF4 11277 ②モールスキンピーチである。まずは生地の厚みを尾崎製作所のダイヤルシクネスゲージ(図78)を用いて測定した。



図78 尾崎製作所ダイヤルシクネスゲージ



図79 コットンサテンジーンと①厚地サテン F4 11277と②モールスキンピーチの厚みと色の比較

コットンサテンジーンは1.56mmの厚さであった。①の厚地サテン F4 11277は1.47mm、②のモールスキンピーチは1.6mmという数値となり、コットンサテンジーンに近いのは②のモールスキンピーチという測定結果となった。

生地の色については肉眼での判断になるが、白さや光沢はどちらもコットンサテンジーンと似ている。

(図79) 以上の結果から布はモールスキンピーチを糸はオリムパスエミーグランデを使用することでアイルランドのマウントメリック刺しゅうと遜色の無い作品が制作できることがわかった。

VIII 考察

一般的にフランス刺しゅうに用いる布はブロードくらいの厚さの生地にミシン糸くらいの太さの糸で刺しゅうするのが普通である。それと比較するとマウントメリック刺しゅうに使用するコットンサテンジーンと20番手相当の糸は桁違いの厚さと太さである。

図案が通常のものよりも大きくほぼ実物大に描かれているので、この様な厚さの生地に刺しゅうするには図案も大きくし、盛り上がるように刺しゅうをしないと生地に対して刺しゅうが負けてしまうということが作品制作をして改めてわかった。

ほぼ実物大の図案を刺しゅうで埋めるのは大変時間のかかる作業である。そのために太い糸を使ってパッ

ド入りサテンステッチや結び目のあるフレンチノットステッチやバリオンステッチなど厚みのあるステッチを多く使うことは効率的に早く図案を埋めることができる。さらに生地の厚さにも負けない盛り上がりも生まれるためマウントメリック刺しゅうにおいて厚みのあるステッチを多く使用する理由の一つと考えられることがわかった。

一般的なフランス刺しゅうでは色糸を使用したり糸の本数を変えることで絵を描くように写実的な表現が出来るが、マウントメリック刺しゅうでは白い生地に白い糸1本だけで刺しゅうをする。そこで、様々なステッチを使用することが表現の手段となる。表現のポイントとしては、サテンステッチとフレンチノットステッチ(平らなステッチと結びのステッチ)の組み合わせやケーブルプレートステッチとマウントメリックステッチ(幅のあるステッチと線のステッチ)の組み合わせのように表情の違うステッチを組み合わせる事が立体的に美しく見せるために効果的である。そのステッチの組み合わせを考えるとこの刺しゅうの楽しさであると考えられる。また、マウントメリック刺しゅうは一般の家庭においてドイリーやナイトドレスケース、ベッドカバーとして日用品として使用されるものであったために洗濯などにも耐える丈夫さが求められていたと思われる。ゆえにステッチも厚く盛り上げて刺しゅうする必要があったと考えられる。オープンワークと言われる布に穴をあける技法は丈夫さを求めるうえでは向いていないため取り入れることがなかったと考えられる。

刺しゅうした生地の周囲にフリンジを付けるのもマウントメリック刺しゅうの大きな特徴である。棒針で編んだ編地の横方向をほどこくことでフリンジが出来るのだが、このような技法はマウントメリック刺しゅう以外では例が無いと思われる。手編みのマフラーの端などにフリンジを取り付ける場合はあらかじめ同じ長さに切り揃えた糸を一つずつ結び付けていくのが一般的な方法だからである。しかし、編地をほどこいてフリンジにすることでフリンジが早く出来ること、長さが揃うという大変効率的な技法であることが確認できた。

マウントメリック刺しゅうとは、刺しゅうと編み物という異なる技法を一つの作品に合わせる大変ユニークな発想を持っている刺しゅうであるといえるのではないだろうか。

VIII おわりに

今回、アイルランドのマウントメリック刺しゅう博

博物館より取り寄せた布、糸、図案を使ってマウントメリック刺しゅうのドイリーの製作過程をまとめることができたことは伝統的なマウントメリック刺しゅうを知るために大変意義深いことだと思っている。ニットフリンジの編み方についてもわかりやすく解説したので、これからマウントメリック刺しゅうを学ぼうとする人たちのための参考になり役立つことを願っている。

謝辞

本稿の作品制作にあたりアイルランドのマウントメリック刺しゅう博物館には布、糸図案の提供を頂きました。制作した作品も良く出来ているとの評価を受けました。ここに大変なお力添えを賜りましたことを深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) リチャード・キレーン著、鈴木良平訳
『図説アイルランドの歴史』源流社 (2000)
- 2) 山本正 『図説アイルランドの歴史』河出書房新社 (2017)
- 3) 『ロンドンーヴィクトリア&アルバート美術館蔵所蔵による英国刺繍図案』日本ヴォーグ社 (昭和52)
- 4) 『作り目のいろいろ』日本ヴォーグ社 p42 (1990)
- 5) 『文化服装講座7手芸編』文化出版局 (昭和57)
- 6) Jane Houston Almqvist, *Mountmellick work*, Colin Smyth Ltd, 1996
- 7) PatTrott, *MountmellickEmbroidery*, SEACH PRESS, 2002
- 8) YvetteStanton, &PrueScott, *mountmellick embroidery*, vetty creatinos, 2008
- 9) Moutmellicke mbroidery 資料
mountmellick museum 所蔵